

日清戦争をめぐる子どもの情報環境

磯部 敦*

はじめに

別にどの本屋でもよい。行きつけの本屋だろうが、たまたま目についた本屋だろうが、とにかく日本近現代史コーナーの書棚の前に立ったとしよう。靖国問題、天皇制などをあつかった書籍にまじって、戦争関連の書籍がずらりとならんでいることに気づくだろう。おそらく第二次世界大戦関連の書籍がいちばん多く、ついで第一次世界大戦と日露戦争になっていくかと思う。けれども、日清戦争にかんする書籍がほとんどないという事実には気づいただろうか。日露戦争に付随して論じたものは何点か見つかるかもしれないが、そもそも「ほとんど」どころか一冊も置いてない本屋のほうが、実は多いかもしれない。

日清戦争——公称では「明治二十七八年戦役」となるけれど、本稿では「日清戦争」で統一する——。原田敬一『日清・日露戦争』が①七

月二三日の日朝戦争、②狭義の日清戦争（一八九四年七月二五日～一八九五年四月一七日）、③台湾征服戦争（一八九五年五月一〇日～同年一月三〇日）の三期間を合わせたもの⁽¹⁾と定義するこの戦争が、近現代史研究において軽んじられているというわけではない。日清戦争は、老若男女すべての人びとを「国民」としていやおうなく国家に帰属させる契機をつくり、いわゆる「五十年戦争」の時代に突入していく起点ともなった歴史的事件であった。初期帝国議会からの流れのなかで日清日露の両戦争を論じた原田前掲書も、日本の軍事拡大の端緒となり、北進論・南進論という今後の方向性を決定づけた点に日清戦争の意義をみとめている（第三章「日清戦争」）。こうした政治史や外交史という視角は、戦争の内実や意義を問うときには有効であるかもしれない。けれども私としては、戦争そのものや当事者には有効ではなく、戦争を享受した人びとのほうに目を向けてみたいのである。その意味において、民衆の動向に着目した大濱徹也『庶民のみた日清・日露戦争——帝国への歩み』⁽²⁾は、きわめて示唆的であった。もっとも大濱が描き出したのは、金融難、物価の高騰、軍事公債などに苦しむ人びとの姿であって（第一章第三節「軍国の狂躁」、原田とおなじくへどのような戦争を体験したのか」と問うところ）に論点があったように思う。また、都市の商工業者から地方の農民、軍人、学生など、あらゆる人びとをひっくるめて「庶民」とすること、複数の視点を提供しようとしているけれど、そのぶん採り上げる実例も少なくなり、かえって「庶民」の戦争体験が描ききれていないのではなにかとも思うのである。「庶民からみた日清戦争」を論ずるうえで肝要なのは、誰の目線から、へどのように戦争を体験したのか⁽³⁾と問うかである。

日清戦争に始まる「五十年戦争」の時代。人生の大半を戦争とともに

生きた人びとのことを考えたとき、多感な少年期に体験した日清戦争の影響はけっして小さくないはずである。本稿が「子ども」に焦点を絞った所以はここにある。彼らの戦争体験とは、一言でいうならば、メディアによる体験であった。ならば、そうしたメディアの特質、書物の言説や出版環境について検証する作業が必要となるだろう。本稿はそのための準備稿で、子どもたちが置かれた日清戦争に関する情報環境を、一度、随想や同時代証言から再現しておこうとするものである。したがって本稿では、個別情報についての検証は行わない。それについては後稿にまわし、本稿ではもっぱら、同時代を生きた人びとの言葉からたちあらわれてくる風景の描出に重きを置くことになるだろう。

一 学校空間のつぼ

子どもたちの身近な生活空間として、まずは学校から始めてみることにしたい。

中勘助の自伝的小説『銀の匙』に、日清戦争に浮かれ騒ぐ学校の様子を描写した一場面がある。

それはそうと日清戦争が始まって以来仲間の話は朝から晩まで大和魂とちゃんちゃん坊主でもちきっている。それに先生までがいっしょになって、まるで犬でもけしかけるようになんぞといえば大和魂とちゃんちゃん坊主をくりかえす。私はそれを心から苦々しく不愉快なことに思った。先生は予譲や比干の話はおくびにも出さないのでべつ幕なしに元寇と朝鮮征伐の話ばかりする。そうして唱歌といえは殺風景な戦争ものばかり歌わせておもしろくもない体操みたい

な踊りをやらせる。それをまたみんなはむきになって目のまえに不倶戴天のちゃんちゃん坊主が押し寄せてきたかのように肩をいからしひじを張って雪駄の皮の破れるほどやけに足踏みをしながらむんむと舞いあがる埃のなかで節も調子もおかまひなしにどなりたてる。……またたださえ狭い運動場は加藤清正や北条時宗で鼻をつく始末で、弱虫はみんなちゃんちゃん坊主にされて首を切られている⁽³⁾。

学校で歌われた「殺風景な戦争もの」の「唱歌」とは軍歌のことである。「私」と対極に位置する、「節も調子もおかまひなしにどなりたてる」子どもたち。たとえば、のちに社会主義に傾倒することになる山川均などは、そうした生徒のひとりであったようだ。

戦争がはじまっていろいろ、唱歌の時間には、「敵は幾万ありとても」や、「海ゆかばみづくかばね」や、「撃てやこらせや清国を、清は御国の敵なるぞ」や、「あなうれし喜ばし、この勝ちいくさ」のようなものばかり歌わせられていた。そして私は、わが軍が天に代って清国を膺懲していることに、このうえもない民族の誇りを感じていた。⁽⁴⁾（『山川均自伝』）

『敵は幾万』『膺てや懲らせや』といった軍歌をとおして（清国＝悪＝膺懲の対象）という図式を覚え、「民族の誇り」を感じる。これを、敵愾心と愛国心の涵養と換言してよいかもしれない。実際、教育者を自認する人びとが軍歌に期待したのはこの二点だったのであり、そうした風潮を背景にして軍歌集は大量に出版されることになったのである。⁽⁵⁾ いや、これは軍歌のみに限ったことではなからう。敵愾心と愛国心は、さまざま

まな商品に共通する謳い文句であった。

* * *

たとえば幻燈。地域住民に対する啓蒙教化政策の一環として開催されていた教育談話会では、教育幻燈会をとおして教育の必要性を説いたが、日清戦争が始まると、教育幻燈会は敵愾心を喚起し愛国心を涵養する場として活用されるようになった。⁽⁷⁾

小山内薫の短編小説に「第一課」がある。中学教員の「僕」が、小説家である「君」への手紙のなかで初恋の女性との顛末をつづった、いわゆる書簡体小説である。物語の発端は明治二十七年。そのとき「僕」は一四歳で高等小学の四年。周りの男子生徒たちと一緒に戦争熱に浮かされ、「木版、石版、写真版を問はず、あらゆる戦争画を買って貰つたり」⁽⁸⁾して、軍人にあこがれている一少年であった。さて、この物語のなかに、学校での幻燈会を語った場面がある。

ある晩、学校の運動場で幻燈会があつた。戦争の絵を写して生徒に忠君愛国の心を興させる為めだつたんだ。……毎朝、僕が「礼」を言ふ時に男生と女生が列ぶ所へ、教場から生徒の腰掛をみんな持ち出して列べた。幻燈の器械は玄関の間へ据ゑた。写す幕は廊下へ下げた。(三九〇頁)

こうして準備が整うと、幻燈会の始まりである。幕には一枚一枚戦争図が映し出されていくのだが、こうした学校幻燈会では前述の軍歌がつきものであったようだ。おなじく「第一課」より引用してみよう。

松崎大尉奮戦の図が映つた時、男生は一同起立して、
「渡るに安き安城の
名は徒のものなれや……」

といふ歌を唄つた。

野戦病院の図の映つた時、女生は一同起立して、

「火筒の響き遠ざかる

あとには蟲の声高く……」

といふのを唄つた。(三九二～三九三頁)

従軍看護婦をうたった唱歌の歌詞は、正しくは「火筒の響き遠ざかる/後には虫も声立てず」。いずれも加藤義清作詞になる唱歌である。幻燈一枚ごとに軍歌が歌われていたわけではなく、「松崎大尉」や「野戦病院」などの決まった題材の幻燈のときに、それにちなんだ軍歌が歌われていたようである。

こうした学校幻燈会、あるいは地域の幻燈会など大がかりな幻燈会が数多く催されていた一方で、近隣家族や子どもたちだけの小規模な幻燈会も開かれていた。日清戦争終了後、すこしく時間は降るけれども、手紙文範から一例を掲げておく。

幻燈会をもよほす文/今晚八時頃より、宅にて征清幻燈会催し度候間、御入来下され度願上候。尤十時頃までにはおそくも済し候筈につき、御小供御婦人御連にてもさしつかへなく候。右、御案内申上候。草々(小中村義象『新撰書翰文』⁽⁹⁾)

学校などで使用される幻燈機器類は「一組二十枚定価金六円⁽¹⁰⁾」と高価な物であったが、家庭用の小型幻燈機などは玩具店などで売られており、映画は一枚二銭から五銭など子どもでも購入できる値段設定であったという。⁽¹¹⁾ 柵山人『日清戦争幻燈会』（藍外堂、明治二十七年）や服部喜太郎『日清戦争幻燈会』（求光閣、明治二十七年）など、日清戦争の幻燈や幻燈会を題材・モチーフにした読み物が大量に出版されているのも、幻燈が極めて身近なメディアであったからに他ならないのである。

* * *

さて、幻燈会の会場として使用されていた学校は、ときに戦利品の展示場でもあった。籠谷次郎「日清戦争の「戦利品」と学校・社寺―その配布についての考察―⁽¹²⁾」によれば、戦利品分与は明治二八年八月一〇日付陸軍省令第一六号「陸軍戦利品整理規定」に始まるという。当初の分与対象は「軍隊其他公衆ノ縦覧ニ供スル陳列場、或ハ神社仏閣⁽¹³⁾」のみであったが、のちに「軍隊」ノ下ニ「学校」ノ二字ヲ追加⁽¹⁴⁾することとなり、ここにおいて「学校」「陳列場」「神社仏閣」という戦利品の縦覧場が決定されることになった。けれども、実は「学校」が分与対象に決まる以前から、すでに分捕品の展示がなされていた形跡がある。長野県更級郡東福寺村在住、荒川九郎なる人物の書き残した日記が長野県立歴史館に所蔵されているが、明治二八年一〇月二一日、荒川は次のように記録している。⁽¹⁵⁾

通明尋常学校ニテ今廿一日より廿二日午後二時迄、清国分捕品始メ古物新物書画ハクラン有リ。打上モアリ。皇帝御真影□為入候ニ付

テノ御祝ヒ。

この時期に「清国分捕品」などの「ハクラン」（博覧）が催された事情について、長野県戦利品配布の一括文書⁽¹⁶⁾にも記載されておらず、いまのところ明らかにしえないでいる。「皇帝御真影」とわざわざ書き記しているところを見ると、この「清国分捕品」は、明治天皇御真影下賜の拝戴式にもなつて県から貸与されたものなのかもしれない。

籠谷前掲論文によれば、「学校」が戦利品分与対象の俎上にあがったのは、次のような認識がその背景にあったからだという。明治二八年八月一七日付『国民新聞』に掲載された寄書の一節を引用する。

過般陸軍戦利品整理規定発布せられ候処、其処分法は如何にも最も
の事ながら、私共の希望は其幾分を国民製造所たる全国の小学校に
も分与せられたく、縦令破片碎残の物と雖ども、征清戦利品といへ
ば、未来の国民たる児童の小さき脳髓にも幾許り深き感覚を与へ、
多くの説話をなして教え込むよりも、其一品にて大なる活ける教育
をなし得ること、存候、……

学校は「国民」を「製造」する場であるという認識だが、もちろん学校は子どもたちの専有空間ではない。明治二八年一月二〇日、長野県上伊那郡高遠町長が陸軍大臣宛に出した願書に、次のような一節がある。⁽¹⁷⁾

……就テハ、当高遠町公立高遠尋常高等小学校へ右戦利品中若干御
下賜相成度、抑当学校ノ義ハ旧藩治ノ所在ニシテ、土農工商雑居仕、
随テ人家稠密、登校生徒モ亦少カラス、……汎ク衆人ニ縦覧セシメ

敵愾心作興ノ一助ニ供シ度奉存候間、……

「児童」のみならず、「士農工商」誰彼を問わずに全部ひっくるめて「国民」として「製造」してしまおうという目論見である。だからこそ、「敵愾心作興」のためには活きた教材としての戦利品が必要になってくる。かくして、子どもの身近に位置する学校空間や教材教具に、「敵愾心作興」という思惑が込められていくことになるのであった。

二 絵双紙屋近景

学校からの帰り道、あるいは家に帰り友だちと連れだって向かう場所として思い浮かぶのは、絵双紙屋であろうか。「千代紙やあね様づくしなどは影をかくして」「至るところ鉄砲玉のはじけたきたならしい絵ばかりかかって」いた絵双紙屋に嫌悪感を覚えた子どももいたようだが、おそらく、大半の子どもたちは足繁く絵双紙屋にかよい、ヒーローながら錦絵にえがかれた軍人にみとれていたことだろう。そして、そのような子どもたちのなかに、谷崎潤一郎がいた。

人形町の角の絵双紙屋清水屋では、その頃盛んに三枚続きの戦争の絵を仕入れて、店頭で吊るして売っていた。画家は水野年方、尾形月耕、小林清親の三人のものが多く、少年に取ってはどれもこれも欲しくないもの一つもなかったが、めったに買ってもらう訳には行かないので、毎日のように清水屋の店の前に立って、眼を輝かして見惚れてばかりいた。成歎の役に勇名を馳せた喇叭卒白神源次郎の戦死の図、原田重吉の玄武門の門破り、北洋提督丁汝昌が鎮遠の

艦上で毒を仰いでいる光景、伊藤博文と陸奥宗光とが李鴻章と卓を挟んで講話談判をしている場面等々は、今も思い出すことが出来るが、分けても私は年方の絵が最も好きで、清水屋の店先で図柄を覚え込んで来ては、熱心にその真似をして描いた。(谷崎潤一郎『幼少時代』⁽¹⁹⁾)

『幼少時代』の谷崎がどのような思いで「眼を輝かして見惚れて」いたかまで知るすべはないのだけれど、絵双紙屋につるされた錦絵は、子どもたちが戦争を視覚的に認識する方途のひとつであったことは間違いない。つまり、錦絵によって戦争の具体的イメージが固定されていたという点でもある。さて、もちろん絵双紙屋という空間にあっては、錦絵だけが戦争の情報を伝えるメディアではない。日清戦争に材をもとめた銅版や石版の草双紙が店頭にならび、「平壤玄武門の一番乗りをした原田重吉などの勇ましい姿」⁽²¹⁾などが描かれた紙メンコ、振り出しを広島にあらためた双六、⁽²²⁾征清骨牌、「縁日でやっている見世物の写し絵を、子供がやるように簡単にした」「写し絵用の絵草紙」⁽²⁴⁾までもが日清戦争一色に染まり、絵双紙屋という空間そのものが日清戦争を視覚的にとらえる場となっていた。けれども絵双紙屋は、なにも視角空間としてのみ機能していたわけではない。次に掲げるのは、明治二八年五月一二日付『毎日新聞』に掲載された天涯茫茫生(横山源之助)「社会の観察/絵双紙屋の前」⁽²⁵⁾の一節。「今日の如きソラ戦争ヤレ構和といへる大問題の現はれ居る現時代に於て、東京生活社会の民人が之に對する思想如何を知らんと欲す」るならば「絵艸子屋の前が最も妙なり」と考える。「余」が、夕食後、絵双紙屋に立ち寄ったときの様子である。

小川町通りを出で、何時もの如く絵艸子屋の前に立ち寄り、馬を蹴
 て大鳥公使京城へ入る図、風雪を侵して我軍隊偵察の図、大探偵火
 刑惨死の図、大寺少将敵弾を侵して奮闘の図、牛莊夜戦大撃闘の図、
 野戦病院兵士病床に在る図、春帆楼両全権談判の図など常に見慣れ
 て居れば別に気を引くこともあらぬまゝ、傍の占領地図に眼を留め
 凝然と暫く眺め居りける、牛莊の戦争と来ちや盛んなもんだ、果然
 同じくわれと共に眺め居りける職人らしきが喋りだす、オ、怖わ
 い事、敵の国はあれ程ひどい事為るの、ようお母様と其傍に可愛ら
 しい声出し、は髪も清楚とした十四五に見ゆる娘。あれは皆んな御
 国の為に此様な目にお会ひ為されたのと答え居りしはその母親なる
 べし、李鴻章メ、生意気な面して居やがる畜生ツ、かく気焰を吐く
 ものは何者ぞと見やれば酒屋の小僧、……此時恰もわれの右に隣し
 て駒下駄、白の足袋、黒の三ツ紋といふ紳士らしき男が突立ち居り
 ぬ、是は何者なるか知れ得ねど或は銀行の役員若くは出来星代言人
 と見たは僻目かそれに連れ伴ふ漢を見れば双子の裕のまゝ、上皮に何
 物も羽織らず昨年買ひ申したと正直にも徽章の見える麦藁帽子を冠
 り居るところなどこれは疑ふまでもなく書生でがな候べし、この
 黒羽織殿役者の絵顔にても精込めて見居るなるべしと思ひきや、あ
 ゝ惜しい事したと呟く、フムと相手の羽織なしは此時鼻鳴らす、馬
 鹿らしいと黒羽織は何をか曰はうする、伴れの男此時突然、李鴻章
 は矢張東洋の豪傑だよと声大きく紳士に叫びぬ、左様だハ、と何が
 呵しくなツて来てか笑ひどよめき其儘スト此店を出で行く、その内
 小僧も娘母子も何時しか居なくなり、残れるはわれと職人二人とば
 かり。

絵双紙屋は、子どもだけの独占空間ではない。「職人らしき」人物に
 「紳士らしき」御仁、書生たちや「新しい三枚続きの出る度ごとに皆買
 い集めている」谷崎潤一郎の叔父のような人びとが絵双紙屋に立ち寄っ
 て、会話をしたり思い思いの発言をしたりする。こうした風景を子ども
 たちの目線からとらえてみれば、彼らの会話した日も日清戦争のイメー
 ジを形づくる情報となっていた状況がみえてくる。絵双紙屋は、視覚的
 にも聴覚的にも情報を享受する場として存在していたのである。

三 街のざわめき

街にはさまざまな音があふれている。本章では、その音をたどって
 くことで、この時期の街の様子を概観してみようと思う。

戦争そのものよりも市街をつつむ空気に記憶をとどめていた長谷川如
 是閑は、浅草花屋敷前の様子を次のように記している。

……花屋敷前の梅林のあつた辺には、毎日のように壮士風の男が数
 人でその頃流行の「ヤッツケロ節」のような政治的の流行歌を唄つ
 て、それを刷つた紙片を売っていた。そのなかには「ダイナマイ
 ト・ドン」だとか「チャン／＼クソ坊主」などという猛烈なものも
 あつて、いずれも禁止されていたものなので、警官が来ると散つて
 しまふのだが、時には私服に捕まつて、大格闘となることも珍しく
 なかつた。(長谷川如是閑『ある心の自叙伝』²⁶)

「壮士風の男」たちが謡う「政治的の流行歌」の数々は、この時期た
 くさん刊行されており、そのおびただしさは『国立国会図書館蔵書目録

明治期』をひもとくだけでも知りえよう。子どもたちもが歌う流行歌について、たとえば小泉信三は次のように回想している。

開戦すると、すぐまた愛国的な流行歌が行われた……。

日清談判破裂して、品川乗り出す吾妻艦。西郷死んだも誰がため、大久保死するも誰がため。遺恨重なるチャンチャン坊主。云々。

私はまたその真似をしてそれを歌いました。(小泉信三「私の履歴書」)

大人の「真似をして」謡っているうちに、清国人Ⅱ「チャンチャン」という図式が脳裏に刻まれる。「敵国人は劣等民族で、まともにシナ人と呼ぶ者はなく、「チャンコロ」とか「チャンチャン坊主」と呼ぶことになっていた」と語るのは、山川均⁽²⁸⁾。一四歳だった山川もまた、なんの疑いもなく侮蔑的な言葉を口にするのだった。

ここで山川が伝える町の様子に目を向けてみれば、「大勝利の報道がくると、町の人々は赤いジュバンなどで「日本勝った、日本勝った、シナ負けた」とか「エライやっちゃ、勝ったぞ、負けなよ」などとどなって踊り狂う」ていた⁽²⁹⁾が、こうした狂騒の最たるものは、東京や大阪で開かれた大規模な祝勝大会であり、明治二八年の正月初売りであつただろう。明治二七年一二月九日開催の東京市祝捷大会の概要については『東京市祝捷大会』⁽³⁰⁾が詳細に報告しているが、景況の一端を引用してみることしよう。「大会の当日は東京全市三十万の戸毎に日章旗を掲げ」、「山車を牽き、或は飾物をなし」、新聞各社や新橋協親会などから山車が出ていたが、たとえば「都新聞社にては新聞に用ひし紙型を以て大竜の首を山車となし、山車の中には楽隊楽を奏し、皇軍に打扮てた

る数十名の社員」が牽いていたという。遠近から人びとが集い参じ、「東京馬車鉄道株式会社の乗客は此日六万六千四拾七人」にのぼり、同社開業以来未曾有の出来事であった⁽³¹⁾。こうした風景は正月初荷において同様で、そこかしこから美麗に飾り付けられた山車が牽き出され、「各商店の初荷思ひくの趣向ありしが、多くハ戦争に当込みて、何も彼も大勝利帝国万歳めでたし⁽³²⁾」といった有り様であったという。もちろん、誰も彼もがこうした賑わいに足を運んでうかれていたわけではない。この喧騒の対極には、生と死のはざまに身をおいた兵士たちと、彼らを送り出した家族たちがいた。しかしながら、「遠征軍の上を思へば、雑煮餅さへ咽に下らず屠蘇の酔さへ覚えずと云ふ」人びと、あるいは「其門には『御親征中年礼不受』若くば『征清中年礼遠慮』等の札を貼付けありし」家々についての情景は、子ども時代に日清戦争を経験した人びとの記憶のなかにみあたらない。開戦もない頃の街の様子を、たとえば長谷川時雨は次のように回想する。

人は何かあると、家の中になんぞいられるものではないと見える。……日清戦争のはじまった時もそうだった。ただ、ワアと男たちが外へ飛出した。ただすたすたと駈けてゆく。下駄で、前垂れがけの、縞物の着つけの人ばかりの町だ。かわった風体のものが交つたって眼にもはいりはしない。なんだか妙に、賑やかにさびしく、興奮した顔⁽³³⁾というのか、近火へでも駈けつけるように、誰も話しあいもしないで、すたすたと、各自バラバラに駈けていった。……みんなが駈けてゆくときは交番だった。何か張紙がしてあって、巡査さんが熱そうな顔をしていた。交番の前は、遠くから黒山の人だかりでもみあっていた。そろそろ帰ってゆくものもあって、その人たち

は、青くひきしまった顔付きで家へと急いだ。今思えば、宣戦布告と招集の張紙であったのであろう。もう涙ぐんでいる娘さんや、前垂れを眼にあてている女もあった。何しろ下駄の音は絶間なく走った。(長谷川時雨『旧聞日本橋』³⁴)

長谷川の記憶のなかには「青くひきしまった顔付き」の男たちと「涙ぐんでいる娘さんや、前垂れを眼にあてている女」たちの姿がある。けれども、「今思えば」という語が示しているように、この場面の意味を知るのはいぶ後になってからのことである。子どもの脳裏に焼きついたのは、街を歩いていれば否が応でも目につく風景であった。たとえばそれは風にはためく国旗であったり、大きなアーチであったり、きらびやかな飾り物であった。そして、これらの風景には何かしらの音が付随していた。

ここでいう音とは、既述のように、広目屋がかなでるラッパの音や口上の声、大人たちの話し声、壮士たちがうたう軍歌・俗謡であったりするのだが、これらは〈戦争〉そのものの音ではない。戦場にこだまする音にくらべると、何とお気楽な音だろうか。たとえば鉄砲玉が飛び交う図柄から、はたして鉄砲の音や兵士たちの怒号や悲鳴に思いをはせることができたであろうか。おそらく、子どもたちの脳裏に刻まれたのは戦争の生々しさではなく、日本軍の大勝利と兵士たちの勇壮な姿であり武勇談だったはずであり、このことは、子ども時代に「眼を輝かして」錦絵などに「見惚れてばかりいた」人びとの記憶が証していよう。子どもたちの、いや大人たちもふくめて、彼らの想像力が戦場や兵士たちの家族にまでおよぶことがないのは、戦争にたいする現実感の欠落が根底にあったからなのである。そしてそれは、如上のお気楽な雰囲気と、なに

よりも自国が戦場になっていないという環境のしからしめるものであった。「戦争祝賀は、お祭とたいして変らなかつた」という山川均の評語が、この時代をつつむ空気をずばり言い当てている。

おわりに

如上、子どもたちの戦争にたいする認識が、どのような環境のなかではぐくまれていったのかを確認してきた。むろん戦争情報は、「日清戦闘自働パノラマ人形」³⁶や菊人形などの見せ物、縁日をはじめ、子どもどうしの遊び、石けん「分捕しやぼん」³⁷などの生活用品にいたるまで、そこかしこに氾濫していた。本稿では、子どもたちにとって身近な空間や日常に限定して論じてきたけれど、時代を包んでいた人びとの熱気や行政の思惑といったものを描き出すことはできたかと思う。こうした状況下にいた以上、子どもたちが戦争熱や愛国熱に浮かされるのも当然のことであって、前掲『銀の匙』における「私」のような生徒は少数派であったかもしれない。とはいっても、所詮は熱である。喉元過ぎれば冷めていくのも、また道理。

愛国熱はひどいッて。成程ひどいかも知れないね。併し、熱には違ひない。その熱たるに於いては、恋愛と何等の相異なし。時が立ちやあ冷めるんだ。(小山内薫「第一課」³⁸)

もっとも日本の「愛国熱」が冷めたのは、五十余年も経ってからのことなのだけれど。

- 注
- (1) シリーズ日本近現代史③、岩波新書(新赤版一〇四四)、二〇〇七年、八六〜八七頁。
 - (2) 刀水歴史全書64、刀水書房、二〇〇三年。なお同書の初出は、一九七〇年に出版された『明治の墓標「日清・日露」―埋もれた庶民の記録―』(秀英出版)で、それに訂正増補および改題をほどこしたのが、一九九〇年に出版された『明治の墓標―庶民のみた日清・日露戦争―』(河出文庫)。同書は、その河出文庫版に増補改題をほどこしたものである。
 - (3) 中勘助『銀の匙』、岩波文庫、一九八七年、一二六〜一二七頁。
 - (4) 山川菊栄・向坂逸郎編『山川均自伝』、岩波書店、一九六八年第五刷、一二八頁。
 - (5) 軍歌集と学校教育の問題については、嶋田由美『大捷軍歌』と明治期小学校唱歌教育』(『大阪女子短期大学紀要』二四号、大阪女子短期大学学術研究会、一九九九年一二月)を参照した。
 - (6) たとえば木村知治『経済教育』(吉岡平助、明治三二年)では、「教育幻燈会/教育幻燈器機ヲ各郡区ニ買入レ、府県私立教育会ノ支会ヲ設ケタル教育界ノ附属トシテ其会員各町村ニ出張シ、幻燈会ヲ時々開設シ、鄭重ニ説明シ、鄭重ニ教育談話ヲナスヘシ」と提案されている(七六頁)。
 - (7) 日清戦争期における教育談話会の有り様については、松田武雄『明治期東京における地域通俗教育の変遷と諸相』(『大学院教育学研究紀要』四号、九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門、二〇〇一年三月)を参照した。
 - (8) 『小山内薫全集』第二巻、春陽堂、一九三〇年、三九〇頁。以下、「第一課」の引用は、すべて同書による。なお、初出は大正四年一月号『新小説』。
 - (9) 小中村義象『新撰書翰文』巻六、吉川半七、明治三〇年、三九丁オ〜ウ。
 - (10) 『大日本教育会雑誌』一五三号、大日本教育界事務所、明治二七年八月。広告文は次のとおり。「日清事件幻燈映画 第老回/一組二十枚定価金六円/韓山の風雲益急なるの時、日清事件の幻燈映画出づ。是れ、一には教育家をして国民の敵愾心を養成するに努めしめ、一には在韓將士慰問の義金を募集するの助に供へんとするにあり。……/東京史浅草区並木町四番地 鶴淵幻燈鋪 鶴淵初蔵」。
 - (11) 『明治世相編年辞典』、東京堂出版、一九六五年、二九七頁。
 - (12) 『社会科学』五六号、同志社大学人文科学研究所、一九九六年一月。
 - (13) 『陸軍戦利品整理規定』第三条、『法令全書』省令、明治二八年、七五頁。
 - (14) 明治二八年一月一六日付陸軍省令第二四号、『法令全書』省令、明治二八年、一四四頁。
 - (15) 長野県立歴史館所蔵『日文記(明治二八・日清戦争之事他)』(〇/一七/二二二)。
 - (16) 長野県立歴史館所蔵『明治式拾九年戦利品配布ニ関スル件』、長野県行政文書(明二九一二A一五)。
 - (17) 前掲『明治式拾九年戦利品配布ニ関スル件』所収、甲第一一五一号。
 - (18) 前掲『銀の匙』、一二七頁。
 - (19) 谷崎潤一郎『幼少時代』、岩波文庫、一九九八年、二二二頁。
 - (20) この時期の銅版草双紙、および錦絵をはじめとする木板文化の衰退については、拙稿『銅版草双紙考』(『近世文藝』第七五号、二〇〇二年一月)を参照ねがいたい。
 - (21) 沢沢青花『浅草っ子』、造形社、一九八〇年増補改訂、三三三頁。
 - (22) 「振出しいづれも日本橋と定まりしが、今年は広島なり。道行も第一軍、第二軍、海軍と分るれば、途中の変化も多し。」(『東京の新年/双六』、『文芸倶楽部』第一編、博文館、明治二八年一月、二三〇頁)。明治二七年九月、大本營が宮中から広島に移された。
 - (23) 『うべ山、乙女、暁』の百人一首骨牌も古びておもしろからず。『チヨイと菊ちゃん、今晚はね、征清骨牌を取るから入らつしやいな。お隣の花ちゃんも、お向の梅ちゃんも、入らつしやるからさ。……』(『東京の新年/骨牌』、『文芸倶楽部』第一編、二三〇頁)。
 - (24) 前掲『浅草っ子』、四四頁。
 - (25) 『横山源之助全集』第一巻、社会思想社、二〇〇一年、七一〜七三頁。
 - (26) 長谷川如是閑『ある心の自叙伝』伝記叢書87、大空社、一九九一年、二一六〜二一七頁。
 - (27) 『小泉信三全集』第一六巻、文藝春秋社、一九六七年、四五二〜四五三頁。
 - (28) 前掲『山川均自伝』、一二八頁。
 - (29) 前掲『山川均自伝』、一二八頁。
 - (30) 『東京市祝捷大会』、土田政次郎著作兼発行、明治二八年。『都市資料集成』第一巻②(東京都、一九九八年)参照。
 - (31) 前掲『都市資料集成』、四六三頁。
 - (32) 『万朝報』雑報、明治二八年一月三日。
 - (33) 『文芸倶楽部』第一編、二三八〜二四二頁。
 - (34) 長谷川時雨『旧聞日本橋』、岩波文庫、一九八三年、三五五〜三五八頁。
 - (35) 前掲『山川均自伝』、一二九頁。
 - (36) 『都新聞』雑報、明治二七年一〇月三〇日。
 - (37) 『時事新報』雑報、明治二七年一〇月二三日。

(38) 前掲『小山内薫全集』第二巻、三八九頁。

【付記】

調査に際してご高配を賜った長野県立歴史館に深謝申し上げます。なお本稿は、平成一九年度特別研究員奨励費による研究成果の一部である。